

Le Yomiuri Shimbun

第38回 渋沢・クローデル賞 受賞者紹介

日本とフランスに関する優れた研究に贈られる第38回 渋沢・クローデル賞（日本側は日仏会館・読売新聞社主催、仏側は同会館・仏国立社会科学高等研究学院日仏財団主催）で、計4人の受賞者が決まった。2回に分けて受賞者を紹介する。

代表的雑誌の歴史 総合的に

中村 督^{たけし}さん 40

(南山大准教授)

【本賞】
「言論と経営」

(名古屋大学出版会)

1964年に創刊した仏の代表的なニューズマガジン「ル・ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール」は、知識人を集結させ、経営的にも成功してきた。まとめられることがなかったこの雑誌の歴史を総合的に描き、「戦後フランスをめぐるユニークな政治文化史」だと高く評価された。

同誌は妊娠中絶の合法化に寄与するなど、左派寄りの立場で社会に関与し続けた。熱い人々が集い、とりわけ70年代ぐらゐまで、粗削りの魅力を放っていたと



いう。「独特の位置から物事を見て、世間がAかBかで分かれている時、いづれでもない議論を提示した。立場が違っても対話が続けられる環境を作っていた」

一方、買収されて主張を変え、こともなく、95年には国内最大部数(47万部)の雑誌に。本書は経営も分析し、広告やレイアウトなどで挑戦し続けた営業・管理部門の姿も描き、編集と両輪でジャーナリズムを成立させていたと評価した。

「他人を助けることをいとわれない成熟した社会にする

ためには、雑誌や新聞が読まれる方がいい」。歴史を振り返り、感じたという。中高生時代からサルトルやカミュに触れ、それらが読まれる仏社会に関心を持

ルソー 語りから読み解く

淵田 仁^{まさし}さん 37

(城西大助教)

【奨励賞】
「ルソーと方法」

(法政大学出版局)

戦後の日本で、18世紀フランスの思想家ルソーは、民主主義を社会の中でどう位置づけるかといった観点から興味を持たれてきた。「社会契約論」などの著書が読まれ、研究された。

それに対し、「これまでとは違う別の視点でルソーを読みみたい」と考え、この

った。読書も執筆も好きで、学者は天職だと思う。「知られていないフランス社会の側面など、今後も『作品としての本』を書きたい」

(小林佑基)



思想家が生きた18世紀フランスの時代そのものに注目した。当時は書籍などのメディアが発達し、サロンといった公共圏が拡充した。「社会」空間が広がる状況で、ルソーの残した草稿や書簡などを丹念に調べ、自らの思考をどう伝えようとしたのか探っていた。

「関心があったのは、コンテンツ(内容)ではなく、その包み方だった。何について逡巡し、受け取り、誰にレスポンスをしようとしたのか。語りというパフォーマンズ面に光をあて、ルソーを読み解きたかった」

大学時代、思想に興味を持つ友達が多かったことから、思想史研究の道に入っていた。「あえて世間から一歩離れて研究する古い感じのやり方が好き」と、穏やかに話す。

インターネットでの言説や社会情勢に関心を持つ。現代への意識は、自らの研究にも影響を与えている。「自分が真だと思っていた事実が他者に誤解される。ルソーもそれに苦しんだ。ここ数年のポスト・トゥルース(脱真実)的状况と似ている。今までの哲学史の手法とは違うやり方で18世紀を見る。時代は地続きだと思ふ」(文化部 前田啓介)

第38回渋沢・クロードル賞 受賞者紹介



セザール・カステルビさん 35

(パリ大学東洋言語文化学部准教授)

「日本の新聞記者と新聞社—
変化する職業的モデルにおける
キャリアと仕事の社会学的分析」
(博士論文)

日本の全国紙、地方紙などの記者約70人へのインタビューや、朝日新聞社での就労体験、公的統計などを基に、長期雇用や年功序列



エドゥアール・レリッソンさん 34

(国立東洋言語文化学院付属
フランス東アジア研究所研究員)

「神道の軌道と日本の満洲の成立—
一宗教的な空間化、帝国の拡大、
近代神道の成立」(博士論文)

中国東北部(旧満州)での神道の普及を研究、考察した。布教に関わった複数の人物の研究が核となり、満州が成立していく

文化

「神道と満州国」相乗的進展

過程で神道が精神的支柱の役割を果たす一方、満州建
国が近代神道に影響を及ぼ
したという相乗的な進展を
指摘した。

日仏会館によると、審査
では宗教史、文化史、政治
史の「学際的研究」の成功

例とされ、極めてオリジナ
リティーの高い労作と評価
された。

南仏マルセイユ近くの出
身。10代の頃、武道に興味
を持つようになり、日本の
時代劇などの映画や漫画も
好んだ。「日本イコール武

道」と思うようになって、
高校生からは合気道、空手
などを取り入れた格闘技の
道場に通った。

大学で薬学部に入るが、
薬学への興味を持てず、進
路を変更することになっ
た。その際、「『日本に
ついて学びたい』という
ことだけが思い浮かんだ」
といい、南仏の大学で日
本語などを勉強すること
にした。修士課程では京都

に約1年留学し、博士課程
では神奈川大学で約1年研
究して、日本への理解を深
めた。

南仏エクス・アン・プロ
バンス近郊在住でエクス・
マルセイユ大学の研究協力
者も務めている。なぜ人は
宗教に引かれるのかに関心
があり、「今後は朝鮮や台
湾の神道を研究して、満州
との比較を行いたい」と話
している。

*いづれも、パリ支局 山田真也

新聞社と記者の関係分析

など「日本のメディアの特
徴」に着目し、日本の新聞
記者と所属する企業の関係
を分析、考察した。

ら、審査では高い評価を受
けた。近年は、日本メデイ
アでの新卒採用が以前ほど
容易でなくなっていると指
摘し、他社で経験した記者
を即戦力として雇用する傾
向が強くなるなど、従来の
在り方に変質が生じつつあ

ることも示した。
子供のころからアジアに
関心があったが、日本のア
ニメを見て育ったことや、
母が日本の文化に興味を持
っていたため、日本語の勉
強を始めた。パリ第7大学
を卒業後の2008年から
09年にかけて日本に滞在
し、洋服などの販売店で働
いた。「憧れの国だった日
本が、リーマン・ショック
で経済的に厳しい状況を迎

えたため、もっと日本社会
のことを深く知る勉強をし
たいと思うようになった。
決定的な経験だった」と語
る。
その後、パリで大学院
に進学し、日本のメデイ
ア研究につなげていった。
「日本のデジタルに特化
したメデイアの行方に関心
を持っており、今後、研究
していきたい」と話してい
る。